

あこがれの喪失と旅ごころの回復

—文芸に見る旅情の変遷—

Transition of Travel Sentiment in Japanese Literature

安田 彰*

YASUDA, Akira

はじめに

若者が旅をしなくなった。

特に海外に出なくなった。

さまざまな理由が考えられるが、ひとつに情報化社会の急速な進展があろう。もちろん自由時間の不足や経済的困窮もその背景にはあるだろう。しかしゲームソフトの販売の伸びやデジタル通信費の増大を考えると、あながちそれだけによるものとはいい難い。若者のお金の使い道の範疇にいまや「旅行」は入らなくなったのだ。

考えてみると、旅をしたいという欲求を支えているものは未知への好奇心やあこがれだろう。ところが、情報化社会の到来によってすべてが既知となってしまう、好奇心やあこがれが冷え込んでしまったのだ。

あこがれは、限られた情報によって想像力が刺激され、その気持ちが増幅されるところに生ずる。対象は現実以上に美化され、手に入れ難ければ難

いほど現実離れして膨らんでいく。逆にあこがれは情報過多によっては生じない。

さて、感情を凝縮し、思いのたけを歌う最良の手立てが詩歌だろう。

萩原朔太郎の作品に旅へのあこがれを歌った典型的な詩がある。

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背廣をきて
きままなる旅にいでてみん。
汽車が山道をゆくとき
みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしののめ
うら若葉のもえいづる心まかせに。
(『純情小曲集』(1925年・大正14年)より「旅上」)

この詩が書かれた1913年(大正2年)頃、フランスはそれほど遠いあこがれの地であった。切な

* 本学経営学部教授

いまでに会ってみたい心の恋人であった。

詩の後段に出てくる「汽車」にしても、詩人の住む前橋から見れば、今からは想像もできない歴としたハレの乗り物であったろう。上野までの列車旅行は新調の背広を着込んで行なうに値する意気揚々たる行事であって、十分フランス旅行の代替足り得たに違いない。

いまやこうしたまだ見ぬ異国への遥かなるあこがれはまったく見られなくなった。いや「異国」とか「異邦」とかの語彙そのものが実体を持たなくなった。

インターネットやデジタル通信によって、ありとあらゆる情報や映像が同期化され、何一つ見慣れぬ (foreign) ものはなくなり、したがって豊かな異国情緒も失われようとしている。たとえ仮想であれ、万物は既知となり、^{シンクロナイズ} 親和なものとなりつつある。

旅情の醸成や旅への誘いが未知への好奇心やあこがれによるものとするならば、後代「21世紀は旅立ち喪失の世紀であった」といわれかねない。

この詩に典型的に見られるような西洋へのあこがれは、近代どのような形で醸し出され形成されてきたのだろうか。

本稿では、憧憬や未知への好奇心を育む重要な触媒として大きな役割を果たしてきた明治以降の詩歌や文学をたどりつつ、近代の旅情の醸成を振り返るとともに、これまでのあこがれや未知への好奇心に代わる新たな旅心と旅のあり方が可能かどうか探ってみることとしたい。

1 高嶺の花たる「文明開化」期の西欧 —上田敏『海潮音』—

長い太平の夢を破って黒船が到来し、欧米列強の圧倒的な力を見せつけられてからというもの、近代日本は自分たちのととも及ばない国々として欧米を見るようになった。

軍事面や政治・経済・社会面では、その制度・仕組みを手本として学び取り入れ、「富国強兵」「殖産興業」の合言葉のもと、列強諸国の仲間入りを果たすべく日本は近代化の道をまっしぐらに走りだした。当時の隣国・清の植民地化に近い窮状を見れば、近代国家としての自立が焦眉の急であったのは言うまでもない。

一方、文化や科学・文芸面でも近代日本は「文明開化」の名のもとに欧米、とりわけ西欧の文物思想をやみくもに取り入れ消化しようとした。キリスト教の容認、太陽暦の採用といった制度上の改革に加え、福沢諭吉の『学問のすすめ』(1872年・明治5年)、中村正直訳の『西国立志編』(1870年・明治3年)などが一世を風靡し、「独立自尊」の精神が盛んに説かれた。その結果、実力社会の到来や自助努力の必要性が浸透し、新聞・私塾による欧米社会の生活ぶりや風俗習慣の紹介も与って、欧米の思想や文学が人々の関心と興味をひきつけた。そして、西欧をすべて理想とし、むこうの理論や史観をそのまま日本に当てはめようとする風潮が一般化した。その姿勢は、後代振り返って「サルまね」と自嘲されるのも宜べなるかなと思われるまでに性急にして無批判なものだった。

ことは文学の世界でも同断であった。

まず西欧の新しい詩歌や文学が「新体詩」の名のもとに翻訳された。その嚆矢は大学教授・井上哲次郎、外山正一、矢田部良吉による『新体詩抄』(1882年・明治15年)であった。「新しい時代意識を新しい日本語で歌いたい、それには新しい詩歌形式を工夫すべし」として提案された新体詩であったが、その試みは当時として画期的なこととはいえ、個々の詩自体は文学的に見てさして優れたものとはいえなかった。

やがて、島崎藤村の『若菜集』(1896年・明治29年)が世に出され、浪漫主義全盛の時代となる。彼は自作4詩集の合本『藤村詩集』(1904年・明

治37年)の序でこう歌った。

遂に、新しき詩歌の時は来たりぬ。そはう
つくしき曙のごとくなりき。あるものは古の
予言者のごとく叫び、あるものは西の詩人の
ごとく呼ばり、いずれも明光と新声と空想
とに酔へるがごときなりき。

こうした高らかな歌声と宣揚された抒情に、当
時の若者は酔いしれた。

そこへ上田敏(1874~1916)による訳詩集『海
潮音』(1905年・明治38年)が現れた。抒情一辺
倒であった詩壇にフランス象徴詩が流れ込んでき
たのである。単なる抒情と調べにとどまらぬ象徴
主義という新しい潮流を紹介し、思想や人生観を
織り込んだ詩の在り方を提示したこの訳詩集は、
日本の近代詩に甚大な影響を与えた。

文学者や詩人の創作だけではない。多くの読者
にとっても、長年培ってきた七五調という伝統的
な韻律を踏まえつつ、形式としてはソネットをは
じめとする西欧の詩句に習い「連」に仕立てた訳
詩の登場はきわめて斬新であった。この文学的結
実はその美しい調べとともに、まだ見ぬ異国への
あこがれと相まって詩人や文学者はもとより幅広
い読者をも魅了した。

山のあなた—カール・ブッセ

山のあなたの空遠く
「^{さいはひ}幸」住むと人のいふ。
^{ああ}噫、われひと、^と尋めゆきて、
涙さしぐみ、かへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「^{さいはひ}幸」住むと人のいふ。

海のあなたの一テオドル・オオバネル

海のあなたの遙けき国へ
いつも夢路の波枕、
波の枕のなくなぐぞ、
こがれ憧れわたるかな、
海のあなたの遙けき国へ。

落葉—ポオル・エルレエヌ

秋の日の／ギオロンの／ためいきの／身にし
みて／ひたぶるに／うら悲し。
鐘のおとに／胸ふたぎ／色かへて／涙ぐむ／
過ぎし日の／おもひでや。
げにわれは／うらぶれて／こゝかしこ／さだ
めなく／とび散らふ／落葉かな。

いまでこそ、口語自由詩も一般化し、詩の持つ
本来の内在律も自明のこととなったが、古代から
明治維新まで連続と続いてきた五七調の短歌とそ
の抒情、そうしたものにしか触れてこなかった
人々に、定型とは言え、こうしたエキゾチックな
彩りや香りの詩歌がどれほど新鮮かつ西欧憧憬の
思いを誘ったか、想像に難くない。

2 瑞々しい憧れの言の葉 —森鷗外他『於母影』—

この『海潮音』が世に出る16年も前の1889年
(明治22年)、ドイツ留学から帰朝した森鷗外
(1862~1922)は新声社の同人とともに、早くも
詩歌の翻訳や創作を通じて音律や文体における実
験的な試みを行ない、その結実を世に問うた。そ
れが訳詩集『於母影』であった。その作中、例え
ば、若々しい西欧へのあこがれはこう歌われている。

ミニヨンの歌 (小金井喜美子訳)

其一

レモンの木は花さきくらき林の中に
こがね色したる柑子は枝もたわゝにみのり
青く晴れし空よりしづやかに風吹き
ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く
くもにそびえて立てる国をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

(以下略)

3 初めての外国風景—ロシアの白樺林 —二葉亭四迷訳『あひゞき』—

一方、散文の世界で初めて紹介された外国の風景はロシアの白樺林だった。徳富蘇峰の依頼で二葉亭四迷(1864~1901)が訳出したツルゲーネフ『獵人日記』の一節であった。「私の訳文は我ながら不思議とソノ何んだが、是れでも原文は極めて面白いです」という但し書つきだったが、この口語文体の翻訳を経て四迷が初めて口語体による小説『浮雲』を書いたのは日本文学史上の革命的な出来事となる。

ロシアの秋の自然や乾いた空気を描出したこの文章は、当時の自然主義文学者たちに大きな影響を与え、そこから国木田独歩の『武蔵野』も生まれたという。今から見てもその描写の新鮮さは失われておらず、ロシアの自然への誘いの力を十分に持っている。そのさわりを見てみよう。

秋九月中旬といふころ、一日自分がさる^{かば}樺の林の中に座してゐたことが有った。今朝から小雨が降りそゞぎ、その晴れ間にはおりおり生^{あたた}まやかな日かげも射して、まことに気まぐれな空ら合ひ。あわあわしい白ら雲が空ら一面に棚^かりくかと思ふと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押し分けたやう

な雲間から澄みて^{きか}伶俐しに見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼空^{あをそら}がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で^{かす}幽かに^{そよ}戦いだが、その音を聞たばかりでも季節は知られた。それは春先する、面白さうな、笑ふやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒舌^{しやべ}りでもなかったが、^{ただやうや}只漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語の声で有った。そよ吹く風は忍ぶやうに^{こずる}木末を伝った。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中のやうすが^こ間断なく移り変った。

4 西欧憧憬に織り込まれる日本批判 —森鷗外『普請中』—

詩歌や翻訳の世界もさることながら、鷗外の留学の成果とも言うべき、海外に材を採った一連の小説群も人々の西欧憧憬を高めるに寄与するところ大であった。

いわゆるドイツ3部作といわれる悲恋物語『舞姫』『うたかたの記』『文づかい』である。アンデルセンの翻訳『即興詩人』もイタリアを舞台にした恋愛小説で、各地の旅情あふれる波乱万丈のストーリーはいやが応にも西欧へのあこがれをかき立てた。

また、単なるあこがれや崇敬の念ばかりではない。文芸の世界にも西欧崇拜と裏腹の「遅れている」日本の現実批判の芽が、時代の先駆者から出始めた。

たとえば鷗外は『普請中』(1910年・明治43年)という短編小説の中で西欧と当時の日本とを巧妙に比較し、西欧賛美と重ねあわせた日本批判を滲ませている。

主人公の渡辺参事官は、ドイツ駐在時代に親しくしていた女との再会を果たすべく、わざわざ来

日した女と歌舞伎座の精養軒ホテルで落ち合う。
以下長いが少し引用してみよう。引用者が施した下線部分に注意してほしい。

渡辺はソファに腰を掛けて、サロンの中を見廻した。壁の所々には、偶然ここで落ち合ったというやうな掛け物が幾つも掛けてある。梅に鶯やら、浦島が子やら、鷹やら、どれもこれも小さい丈の短い幅ふくなので、天井の高い壁に掛けられたのが、尻はしを端折はしよったやうに見える。食卓の拵こしらへてある室の入口を挟んで、聯れんのような物のかけてあるのを見れば、某大教正の書いた神代文字といふものである。日本は芸術の国ではない。

伝統的な日本絵画の掛け軸を例に旧弊たる日本文化批判が挿入される。西欧の美術に触れてきた自分の肥えた目を誇らしく思う意識がちらつく。

廊下に足音と話し声とがする。戸が開く。渡辺の待ってゐた人が来たのである。麦藁むぎわらの大きいアンヌマリイ帽に、珠数飾じゆずりをしたのを被かぶつてゐる。鼠色の長い着物式じゆずの上衣の胸から、刺繡かぶをした白いバチストが見えてゐる。ジュポンも同じ鼠色である。手にはヲランの附いた、おもちゃのやうな蝙蝠傘かきを持ってゐる。渡辺は無意識よそほに微笑を粧よそほつてソファから起き上がって、葉巻を灰皿かきに投げた。女は、附かきいて来て戸口に立ち留とどまっている給仕ちよつとを一寸見返ちよつとつて、その目を渡辺に移した。ブリュネットの女の、褐色の、大きい目である。此この目は昔度々見たことのある目である。しかしその縁かきにある、指の幅程な紫掛かきかった濃かきい髪かきは、昔無かきかったのである。

「長く待たせて」
ドイツドイツことばの独逸語である。ぞんざいな詞と不吊合ことばに、傘を左の手に持ち替かきへて、おうやうに手袋に

包んだ右の手の指ゆびさき尖さきを差し伸べた。渡辺は、女が給仕の前で芝居うをするなど思ひながら、丁寧にその指尖ゆびさきを撮うまんだ。そして給仕にかう云った。

「食事の好いときはさう云つてくれ」
給仕は引ひっ込んだ。

女が入ってくる。かつてと違って生活のやつれを滲しみませる女の描写と見せて、日本とは大いに異なる服装や表情を微細こまに描き分けている。渡辺の立ち居振る舞いに洋行帰りのエリート意識がみえ、給仕との違いの描きわけも巧みだ。

暫くして女が云った。
「大さう寂しい内ね」

「普請中まてなのだ。さっき迄恐ろしい音をさせてゐたのだ」

「さう。なんだか気が落ち着かないやうな処ね。どうせいつだって気の落ち着くやうな身の上ではないのだけど」(中略)

「(略)これからどうするのだ」

「アメリカへ行くの。日本は駄目だめだって、ウラチオあてで聞いて来たのだから、当あてにはしなくってよ」

「それが好い。ロシアの次はアメリカが好からう。日本はまだそんなに進んでゐないからなあ。日本はまだ普請中だ」

あるいは

(女は：引用者) さっきから幾つポタンかの控鈕ポタンをはずしていた手袋をぬいで、卓越ポタンしに右の平手を出すのである。渡辺は真面目に其手をしっかり握かきつた。手は冷たい。そしてその冷たい手が離れずかきにあて、暈くまのできた為めに一倍大きくなったやうな目が、ちっと渡辺の顔に注がれた。

「キスをしてあげても好くって」

渡辺はわざとらしく顔を^{しか}蹙めた。「ここは日本だ」

叩かずに戸を開けて、給仕が出て来た。

「お食事が宜しうございます」

「ここは日本だ」と繰り返しながら渡辺は起って、女を食卓のある室へ案内した。丁度電燈がぱっと附いた。(中略)

シェリイを注ぐ。メロンが出る。二人の客に三人の給仕が付き切りである。渡辺は「給仕の賑やかなのを御覧」と付け加へた。

「あまり気が利かないようね。愛宕山(引用者注：女の泊っているホテル)も矢つ張りさうだわ」肘を張るやうにして、メロンの肉を剥がして食べながら云う。

鴎外は極めて慎重かつ巧妙に、当時のエリートとしての海外留学体験を披歴しながら、自らの身についた西欧のマナーや物腰にあわせ、若い西欧女の魅力を描写している。その一方で、普請中の「精養軒」を日本になぞらえ、そのハード・ソフトの「遅れ」を小説のタイトルとしている。鼻もちならぬ匂いがしないでもないが、よくできた短編だ。

このようにして文芸の世界は、遥かなる西欧へのあこがれと江戸を引きずる日本の前近代性批判とを一枚の織物として提示した。情報といえば、翻訳を通した紹介や現地体験をした一部エリートの「洋行帰り」の体験報告しかなかった時代である。さまざまな意匠を取り入れたこうした文芸がどれほどの力を持って人々の興味と関心を引き付けたか、想像に難くない。

ここで夏目漱石(1867~1916)に触れておかねば片手落ちになろう。

よく知られているように漱石は1900年(明治33年)から1903年(明治36年)まで約2年半イギリスに留学する。しかし鴎外とは異なり、ロンドン

での生活や英文学研究に違和感を覚え、昂じて神経衰弱に陥った。したがって、帰国後の1905(明治38)年、英国に材を採った小品すなわち『倫敦塔』『幻影の盾』『琴のそら音』『一夜』『^{かいろう}薤露行』を書いてはいるものの、その作風は鴎外のロマンティズムあふれる華麗なものとはほど遠い、よくいえば重厚悪く言えば暗いものであった。英国中世の神話や血ぬられた歴史を踏まえた諸作は、知的な文学趣味や興味を満たすものではあったが、西欧へのあこがれや誘いを促すものとは言えなかった。

5 手放しのフランス礼賛 —永井荷風の『あめりか物語』 『ふらんす物語』—

やがて時代は下り、鴎外や漱石のような明治国家によるエリートの海外派遣から、民間の有産階級の子弟による海外遊学の時代を迎える。明治末期から大正にかけ、文人たちは異国とりわけ美と芸術の都たるフランスにほとんど恋心に近い憧憬の念を抱いた。その最たる文学者が永井荷風であった。

荷風には日本の急速かつ軽薄な近代化に対する失望と蔑視があった。その対極に盲目的なフランスへの傾倒があり、すべての美意識や価値判断はここに根ざしていた。欧米からの帰国後、減び行く江戸文化へ回帰し、花街や下町情緒に耽溺したのもその反動であった。そして生涯、反時代的耽美と放蕩の世界に身をやつした。

後の『ふらんす物語』(1909年・明治42年)へと結実する『ふらんす日記』(1908年・明治41年)の一部“ADIEU(わかれ)”を以下に、見てみよう。今しもパリに別れを告げ、ロンドン経由日本へ帰国するという二日間のうめき声にも似た惜別の情である。

絶望——Desespoire(デゼスポワール)——

最後の時間は刻々に迫つて来た。明日(あした)の朝には、どうしても此の巴里(パリ)を去らねばならぬ。永遠に巴里と別れねばならぬのである。(略)

放蕩に夜を明(あか)して帰る道すがら、幾度となく眺め味(あじわ)うた巴里の街、セーヌの河景色も、あゝあれが見収(みおさ)めであつたのか！(略)

自分は寝台の上から仰向(あふむ)きに、天井を眺めて、自分は何故一生涯巴里に居られないのであろう、何故フランス人に生れなかつたのであろうと、自分の運命を憤るよりは果敢(はかな)く思ふのであつた。自分には巴里で死んだハイネやツルゲネフやシヨールパンなどの身の上が不幸であつたとは、どうしても思へない。兎に角、あの人達は止(とゞ)まらうとした藝術の首都に永生止り得た藝術家ではないか。(略)

あゝ自分は何故(なぜ)、こんなにフランスが好きなのであろう。

フランス！ あゝフランス！ 自分は中学校で初めて世界歴史を学んだ時から、子供心に何と云ふ理由もなくフランスが好きになつた。自分は未だ嘗(かつ)て、英語に興味を持つた事がない。一語(ひとこと)でも二語(ふたこと)でも、自分はフランス語を口にする時には、無上の光栄を感じる。(略)旅人の空想と現実とは常に錯誤すると云ふけれど、現実に見たフランスは、見ざる以前のフランスよりも更に美しく、更に優しかつた。あゝ！ わがフランスよ！ 自分はおん身を見んが為めにのみ、此の世に生れて来た如く感ずる。自分は日本の国家が、藝術を虐待し、恋愛を罪悪視することを見聞きしても、最早(もは)や要なき憤怒(ふんぬ)を感じまい。

日本は日本伝来の習慣によつて、寧(むし)ろ其(そ)が為(な)すまゝたらしめよ。世界は広い。世界にはフランスと云ふ国がある。此の事實は、虐(しいた)げられたる我が心に、何と云ふ強い慰めと力とを与へるであらう。フランスよ、永世(とこしへ)に健在なれ！

今から見るとほとんど「恋わずらい」に近いまでの思い入れで、尋常ならざる熱狂振りである。日記という性格上、十分には吟味されない表現も目に付くが、恋焦がれるフランスへの傾倒という事情は『ふらんす物語』でも変わらない。

長編『あめりか物語』(1908年・明治41年)を受け、念願のフランスにたつて用意周到に書かれた『ふらんす物語』(1909年・明治42年：発行禁止)でも、たとえば敬愛するモーパッサン賛美はこうなる。

ああ、モーパッサン先生よ。私は今、巴里の停車場へ着くと、直ちに、案内記によつて馬車を走せ、先生が記念石像の下に、身を投げかけています。「(モーパッサンの石像を拝す)」

6 荷風の美意識のエッセンス

—『珊瑚集』—

やがて荷風のフランス憧憬は、自分の敬愛する詩人の珠玉の作品を自分好みの日本語の詩句に仕立てるといふ趣味の極致に到達する。それが『珊瑚集』(1913年・大正2年)である。

荷風の趣味に色濃く染められたこの訳詩集は多くをボードレール、ヴェルレーヌの詩篇においているがランボーはわずか一編、その詩を見てみよう。

そぞろあるき—アルチュウル・ランボオ

あを
蒼き夏の夜や
麦の香に酔ひ野草のぐさをふみて
小みちを行かば
心はゆるみ、我足さはやかに
わがあらはなる額ひたひ、
吹く風ゆあに浴みすべし。

われ語らず、われ思はず、
われただ限りなき愛
たましひわきいづ魂おぼの底に脇出るを覚ゆべし。
宿なき人の如く
いや遠くわれは歩まん。
恋人と行く如く心うれしく
「自然」と共にわれは歩まん。

放浪と熱狂の天才少年・アルトゥール・ランボオの片鱗はどこにもなく、情熱を秘めつつも優しく穏やかな恋情の調べと叙情に身を浸すという荷風好みの一編に仕立て直されている。以下に掲げるポール・ヴェルレーヌの流れるような調べと読みまがうばかりだ。

ましろの月—ポール・ヴェルレーヌ

ましろの月は
森にかがやく。
枝々のささやく声は
しげり
繁のかげに
ああ愛するものよといふ。

底なき鏡の
いけみづ
池水に
影いと暗き水柳みづやなぎ。
その柳には風が泣く。
いざや夢見んふたり、二人して。

やさしくも、果はて知られぬ
しづけさは、
月の光の色しに浸む
夜の空より落ちかゝる
ああ、うつくしの夜や。

7 南蛮趣味の結実たる秘曲
—北原白秋『邪宗門』—

ちょうどこれに先立つ形で、荷風とほぼ世代を同じくする北原白秋（1885～1942）が、学生時代、友人たちと連れ立って九州旅行を行ない、天草で出会ったキリスト教宣教師フレデリック・ガルニエ（1886～1941）や天草四郎の島原の乱史跡に深い感銘を受けている（1907年『五足の靴』）。

白秋の南蛮趣味はここから始まったとみられ、その影響は旅行に同行した木下杢太郎の戯曲『南蛮寺門前』をはじめ文壇に広く浸透し、芥川龍之介のいわゆる「キリシタンもの」といわれる未完の新聞小説『邪宗門』にまで及んだ。

「キリシタン」「バテレン」を核にする「南蛮趣味」は、ポルトガル文化の日本独自の受容を通して、明治末から大正期にかけ、特殊な混血文化・異国趣味としてひとつのジャンルを築きあげた。それは童話や童謡を含む文学の広がりをもたらし、装飾や工芸といった美術の世界にまで及んだ。

その創始者ともいべき白秋の詩集『邪宗門』を見てみよう。

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、きりしたん
切支丹でうすの魔法。
かびたん
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、
色赤きびいどろを、匂と鋭きあんじやべいいる、
南蛮さんとめじまの棧留あらし縞を、はた、阿刺吉ちんた、珍ちんた酔の酒を。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、
 禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖磔、
 芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、
 波羅華僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

(以下略)

8 口語自由詩への広がり と 身近になった西洋

—堀口大學 訳『月下の一群』—

近現代詩に決定的な影響を与えた訳詩集といえ、既述のとおり『近体詩抄』に始まり『海潮音』『於母影』を経て、『珊瑚集』に至るのが一般的だ。

しかし、伝統的な擬古文や七五調を踏まえつつも、新たな口語体の訳詩を編出し、西欧の風土や心象風景の魅力と香りを生き生きと伝えたという点では、堀口大學(1892~1981)の『月下の一群』(1925年・大正14年)を忘れるわけにはいかない。

大學は荷風に生誕遅れることひと周りの年齢だが長寿に恵まれ、荷風より20年も長生きした。外交官であった父に連れられ、メキシコを皮切りに青春期をベルギー、スペイン、スイス、ブラジル、ルーマニアで過ごしている。ごく稀な例ではあるが、単なるあこがれを越えて地に足をつけた国際派の詩人がこの頃から生まれ始めたのだ。その上、『すばる』に依って与謝野鉄幹・晶子の薫陶を得た筋金入りの歌人だ。その結晶が、荷風の『珊瑚集』に刺激を受けて出された『月下の一群』である。

大學は荷風に倣って、自分好みの詩人と詩片を自在に組み合わせて翻訳したまでだと言うだろう。しかし上田敏の『海潮音』が明治の文芸感覚を一変させたように、大學の『月下の一群』も昭和の感性と詩語に革命を起こした。よもや詩壇の起爆

剤になろうとは大學自身も想定してはいなかっただろう。

しかしたとえば、

耳—カンヌ第五—ジャン・コクトー

私の耳は貝の殻

海の響をなつかしむ

というわずか2行の平明な日本語の句が、地中海の潮風や波音、南国の太陽のぬくもりをもたらすという発見と体験は、これまでの詩壇では考えられなかった出来事なのだ。

あるいはかつて人口に膾炙した有名な次の口語自由詩、自在に語られる詩句が次々とパリの情景やセーヌの流れを浮かび上がらせ、そのルフラン(繰り返し)と詩の内在律に時間の経過や恋人たちの過去が乗ってゆく。詩は音楽のような時間の芸術として水にながれてゆく。

ミラボー橋—ギヨーム・アポリネール

ミラボー橋の下をセーヌ河が流れ

われらの恋が流れる

わたしは思い出す

悩みのあとには楽しみが来ると

日も暮れよ 鐘も鳴れ

月日は流れ わたしは残る

手と手をつなぎ 顔と顔を向け合おう

こうしていると

二人の腕の橋の下を

疲れたまなざしの無窮の時間が流れる

日も暮れよ 鐘も鳴れ

月日は流れ わたしは残る

流れる水のように 恋もまた死んでゆく
恋もまた死んでゆく
命ばかりが長く
希望ばかりが大きい

日も暮れよ 鐘も鳴れ
月日は流れ わたしは残る

日が去り 月がゆき
過ぎた時も
昔の恋も 二度とまた帰ってこない
ミラボー橋の下をセーヌ河が流れる

日も暮れよ 鐘も鳴れ
月日は流れ わたしは残る

上田敏や永井荷風同様、大學も自分好みの詩人と詩のみを選び出した。アンソロジーとかオムニバスとかいわれるこの手法はいわゆる「いいとこどり」である。近代詩人の有志たちは自分の感性と表現の嗜好に合わせて外国の詩歌を訳出したのだ。それが新しい時代の詩語としての日本語を創り出し、鍛練することにつながった。しかも、異国の地での生活と異文化体験をろ過したがゆえに、詩語としての日本語をつくることに敏感になり、結果そのような日本語をもつ日本を愛することにもつながったのだ。

9 類を見ない地中海世界の現出 —西脇順三郎『Ambarvalia』—

雨

南風は柔い女神をもたらした。
青銅をぬらした、噴水をぬらした、
ツバメの羽と黄金の毛をぬらした、
湖をぬらし、砂をぬらし、魚をぬらした。

静かに寺院と風呂場と劇場をぬらした、
この静かな柔い女神の行列が
わたしの舌をぬらした。

眼

白い波が頭へとびか、ってくる七月に
南方の綺麗な町をすぎる。
静かな庭が旅人のために眠ってゐる。
薔薇に砂に水
薔薇に霞む心
石に刻まれた髪
石に刻まれた音
石に刻まれた眼は永遠に開く。

こうしたギリシアやエーゲ海のまぶしい太陽と風景が日本の詩の世界にかつて現出したことがあったろうか。明るい南国の夏の通り雨が大理石の街並みを濡らす。エーゲ海の入江の町に静かにたたずむ古代彫刻。私たちはいつしか旅人となって白いギリシアを歩いている。

「ギリシア的抒情詩」と銘打たれた西脇順三郎(1894~1982)のこの詩集(1933年・昭和8年)は、萩原朔太郎の口語体自由詩『月に吠える』に影響を受けて書かれたといわれている。しかしながら、その口語体による言葉づかいはともかく、大学の卒業論文を全文ラテン語で書いたこの俊英は、イギリス留学時代に英文詩集『Spectrum』を自費出版して現地の反響を呼んでいる実力者だ。

この詩集発表後10余年を経て編まれた第2詩集『旅人かへらず』と、続く『近代の寓話』『第三の神話』において、順三郎は西欧的教養と日本的感性を自在に融合させた独自の詩的世界を確立、現代詩人としての地位を不動のものとした。

順三郎の後半期の詩は、もう一人の内面たる東洋的な「幻影の人」が所かまわず出没し、常識的な感覚で読みこなすのには骨が折れるが、この処

女詩集は想像力を働かせつつ素直に読みさえすれば、そのくっきりと明るい詩的世界に入っていくことができる。

古代と現代との遙かな時間を行き来して、悠久の時の流れに浸されていると、果てしのない長旅をして来たようで、そこでは詩中の少年も雨もドルフィンも小川も堇も淡く息づいている。象徴詩などと難しく考えず、硬水のように澄み切った空気を感じ「(くつがえされた宝石)のような朝」(「同詩集」)のきらめきにまぶしさを覚えれば、輝かしい地中海世界の抒情詩の神髄を掴めることだろう。

10 西欧憧憬を核にした自己探求 —森有正—

かくして時代は下り、日清・日露あるいは第一次世界大戦という国際列強との厳しい戦争体験を経て、日本はそれぞれに辛勝しつつも、欧米競合国の底力あるいは力量の差を見せつけられる形となった。ことは軍事・経済面にとどまらず、生活の豊かさや文化・文明の厚みにまで及び、人々の西欧賛美はますます深まっていく。その一方で、日本人としての自己同一性アイデンティティに思いを巡らせるアンビバレント両価感情的な生き方をするいわゆる文化人・知識人が出てくる。

その典型が、フランス文学者で哲学者の森有生(1911~1976)であろう。

森は明治の元勳・森有礼(1847~1889)の孫にあたり、2歳で洗礼を受けてクリスチャンとなり、6歳でフランス人教師についてフランス語を学ぶという特異な環境に育った。卒論はパスカル研究、大学でフランス思想史の教鞭をとるが、第2次大戦後フランスに留学、そのままパリにとどまり、日本語・日本文化を教える。この間にフランス人女性と再婚し、また離婚している。日仏を行き来し、日本の大学にポストが内定するもパリで客死、

墓所は多磨霊園というデュアルな人生であった。パイプオルガン奏者としても知られるが、日本とフランスという2国の間で思索を深める一方、自己の拠り所を求め続けた「精神のディアスポラ」ということもできよう。

『バビロンの流れのほとりにて』『城門のかたわらにて』『砂漠に向かって』『遙かなノートルダム』『旅の空の下で』といった著書のタイトルは、デラシネ(根なし草)的生き方にあこがれる若い知的世代に訴えかける力を持った。

「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」(ゴーギャンの代表作のタイトル)といった若者らしい生き方の模索と相まって、この時代、彼の著作は一定の影響を持ったといえよう。

森有正は人格の形成や自立心を育むものを人間経験の深まりと捉え、知性の高みと経験の深みから「いかに生きるか」を思索した。その文章は次のようなスタイルを持つ。

私には深まりが大切なのである。深まりとは人間経験の深まりである。私にとって経験とは現実そのもの以外の何ものでもなく、しかも経験であることによって、現実には無限の深まりが可能であり、神にさえ到りうるのである。

(『いかに生きるか』講談社現代新書)

平静な精神を、いかなる状況にあっても、常に、保ち続けること。そして、沈黙のうちになしとげる純粹の行為(プルースト)、それを死に到るまで続けること。僕はもう半ば以上も人生を横切ってきたが、その生がゆっくりと僕を追いぬき始めた。常に僕を超えて上昇し続けていく生は何と美しいのだろう。光波の働きによって僕の生きた痕跡がすっかり消え去ってしまうところまでそれは続いて

いく。こうして自然は続いて行く。(『全集・第14巻』)

私にとってパリとの出会いは危懼の念をもって始まった。それはパリについて起ったものが「感慨」ではなくて、本質的には、一つの「感覚」だったからである。それが一つの感覚であったとしたら、それに身を任せるといふ以外のどういう態度が私に可能だったであろうか。感覚こそは自分そのものでありながら、しかも自分を超越する唯一のものだからである。「自分を超越」ものに身を委せることから、すべての新しい事態は生れて来る。(『全集・第4巻』)

11 明るい意匠による巧みな西欧礼賛 —辻邦生—

森有正が内向的思索に向かうタイプであるとすれば、一世代遅い辻邦生(1925~1999)は、同じ模索型であっても外向的で明るい生き方を志向した作家であった。

辻邦生がその初期作品『廻廊にて』や『夏の砦』の中で表現したかったのは「感覚によって感じられる精神的領域」を通じて、現実世界を「自分の心情、自分の眼ざし、自分に属する世界」とすることであった。それはかつてギリシア旅行中に、アテネのアクロポリスの丘・パルテノン神殿を見たときの啓示的な体験がもたらした信念であった。

「この遠く峻しい岩山の上に端然と立つアクロポリスの姿」は「与えられた自然の意志に抗し、人間の領域を切りひらき、〈人間〉をして〈人間〉とせしめた人間の意志を表わしている」と辻は瞬時に悟る。そして「歓喜をともなった理解」と「ふるえるような感動」に打たれる。「等しく課せられたその(自然の:引用者)強暴さに打ちかかって、打ちかつことのできた民族だけが、この文明

を築くという仕事に進めるのかも知れない」と痛感する。(『岬そして啓示パリの手記Ⅳ』1974)

彼の創作活動はここに原点を置くことになる。

たとい死や虚無にさらされても、今ここに地上に生かされてある喜びは確かなものであり、生は生きるに値する、単純にこの世にあることを寿げば、それが永遠を観ることだ、という確信である。

主要作品である歴史小説の対象は、古代ギリシア・ローマや中世イタリア、現代西欧から日本の中世近世にまで及ぶが、その主調低音は変わらない。

ひたすら書き続けることをモットーとした辻作品は、その幅広くも華やかな題材や、知的で^{ベダンティック}学術的しかし瀟洒な言い回しが若者ことに女性層の読者をとらえた。万人の憧れであるフランスという舞台を、ジャーナリストティックな嗅覚(父親はジャーナリスト)も働かせつつ、「書いたことだけが現実になる」として、例えば下記のような文体で書きつづった。

ギリシア旅行の仕度が次第に進む。翻訳の清書も終り、明るいパリの初秋の空の下で、地中海の空を想像する。窓から射し込む正午の明るい光は、フェルメールの絵のように透明で硬質の空間をつくる。メンデルスゾーンの〈イタリア〉の第二楽章の追憶的な、幸福な旋律をききながら、A(中世ビザンツ美術の権威・辻佐保子夫人のこと:引用者)が光のいっぱい入る台所で洗濯しているのを見ている。イタリアに出かけたのは去年の昨日だ。古代的な、地中海的な、ルネサンス的な、華麗なイタリアは、僕にとって生涯の回転となった。そして、その先に光っている純粋な古代、純粋な地中海が、今、僕に近づく。それは僕の宿命の転換になるかも知れないのだ。しかし、何とこの緻密な〈現在〉まで到達したのか。午前、正午の光とメンデルスゾーン

とフェルメール。そこに一つの世界があり、暑い夏の午後五時のアンダルシアの野が彼方にある。この世界に、真に、生きること、惑溺すること、そこから僕が僕として帰ってくるだろう。ギリシアはこの〈世界〉のはじめての世界なのだ。（『街そして形象パリの手記Ⅲ』1973）

辻邦生のパリの住まいは、詩人P・ヴェルレーヌが息を引き取った建物の左隣で、ヴェルレーヌと並んで記念プレートが掲げられているという。

12 猥雑なアメリカ文化への憧れ —植草甚一によるニューヨーク賛歌—

これまで見てきた文学者はすべからくフランスをはじめとする西欧へ顔を向けていた。ここへ来て初めて、アメリカ文化に傾倒する作家が現れた。

それも、いかにもアメリカらしく幅広いサブカルチャーを取り上げた、まったく新しい形のエッセイスト・植草甚一（1908～1979）である。

担当分野は映画評論から雑誌編集、ジャズやミステリー、ファッションと実に広汎だ。驚いたことに、これほどの若者受けするジャンルを手掛けながら、世代的には森有正と同じであり、辻邦生より一回りも年長である点だ。

それは彼の経歴に負うところが大きいかもしれない。

幼い頃からの映画少年で、長じては幾度も受験に失敗し、また大学に入学しても落第を重ね、除籍処分を受けている。ただし、器用で多才な面があって、在学中から劇団のポスターやイラストを手がけたり、ファッション誌の翻訳やセーター・水着のデザインをしたりして幅広い才能を発揮している。

28歳の時（1935年）東宝に入社、このころ初め

て映画評論でデビュー、のちの東宝社長・吉岡重三郎のゴーストライターとして活躍する。しかし戦後間もない1948年、労働争議で東宝を退職、それからは『キネマ旬報』『映画之友』『スクリーン』などに映画評論を書き始め、“J・J”のニックネーム（甚一の頭文字）で有名になる。

映画評論の傍ら、1950年代後半、推理小説全集の監修や作品選定、解説執筆を担当、本格ミステリーの浸透・定着に貢献した。ジャズを聞き始めたのもこの頃からといわれる。

そうした植草に転機が訪れるのは1960年代半ばのことであった。

この頃若者向けの雑誌や週刊誌が相次いで発刊され、そのひとつ『平凡パンチデラックス』などに紹介されたのがきっかけとなり、植草は一躍若者の間で有名になる。60歳近い年齢でのデビューだ。『ジャズの前衛と黒人たち』（1967年）『ぼくは散歩と雑学が好き』（1970年）などが、幅広い若者の間で読まれ、若者の興味と関心はこれまでの外国憧憬とは違った、アメリカのサブカルチャーへと広がって行った。植草ブームは本格化し、膨大な原稿執筆の傍ら、雑誌『ワンダーランド』の責任編集を務め、これがやがて現在の『宝島』へと発展していく。

いまでこそサブカルチャーは世間で持てはやされているものの、当時は植草のように世間を斜に構えつつも、趣味のいい（「ベストドレッサー賞」を受賞している）万能タレントや外国通の自由業で成功しているオトナは貴重であった。

エリートではないけれど風通しがよく、カッコいいシティ・ボーイとしての生き方は若者のあこがれであった。この頃から、映画・広告・デザイン・編集・軽音楽・ファッションといった自由業に若者は引かれていく。アメリカの先端文化情報が欧州に代わって最大関心事となりはじめた。

そうした植草も、実は1974年に初めてニューヨークに渡ったのである。この3ヶ月半の滞在中、

彼はアメリカ最先端のサブカルチャー情報をエッセイとして発表、さらに注目を高めた。しかし植草のすごいところは、渡米のはるか前からアメリカの本や雑誌でニューヨークの街を調べつくしており、渡米する人の問い合わせには実に細かに答え、適切な立ち寄り個所のアドバイスまでをしていたという点である。これはほとんど神話化された実話で、当時は原書によるブキッシュな情報入手が唯一の手法という知的な営みが尊敬された時代であった。

モダンジャズを愛した植草は4000枚のレコードを収集し、蔵書は4万冊にのぼった。終の住処となったマンションでは2部屋が書庫に充てられていたという。

13 硬質な文体でギリシアの陽射しを再現

—小川国夫『アポロンの島』—

もちろん当時の若者がすべてニューヨークやアメリカ西海岸を向いていたわけではない。海外旅行の行き先としては依然ヨーロッパが根強いあこがれの的であった。1970年代、為替も1米ドルが360円という固定相場制の時代、若者は貧乏旅行や無銭旅行、ヒッチハイクを前提に一人か仲間数人とで海外旅行をはじめ出した時代であった。

そんな中、ごく地味ではあったが、フランス留学中の若者が、ヴェスパと呼ばれるイタリア製のスクーターで地中海方面を旅行し、その紀行文が文庫本になった。小川国夫(1927~2008)の『アポロンの島』(1967年・昭和43年)であった。

実はこの旅行自体は1950年代に行われ、帰国後にその放浪体験を私家版として刊行したが全く売れなかった。8年後に作家・島尾敏雄がこれを見つけて絶賛、注目を集めたといういきさつがある。単車や自転車で行く旅行をする若者も出始めており、少数ではあったが関心を集めたと思われる。

小川自身カソリック信者ということに加え、従来の小説のような時間の流れに沿った筋の展開も少なく、決して読みやすい紀行文とは言えない。しかし地中海地方の明るく乾いた空気と光が肌を感じられ、港町の様子や旅先で出会った人々とのさりげない交流が堅い石のような文体で積み上げられる。心理描写もなく、事実がそのまま正確に伝えられるだけのそぎ落とされた言葉。文字通り小川国夫の青春と文学の原点が詰まった紀行文だ。作者自身当時を振り返ってこう言っている。

……やはり、しきりに思い出すのは、二十代の終りに単車にまたがって、計百二十日間スペイン、イタリア、ギリシャなどを走った経験です。あそこに旅の原点があったなど、感じるのです。ただ、来る日も来る日もハンドルのしがみついていた自分が(今もその記憶は足の傷跡も含めて、体に残っていますが……)みじめに、恰好悪く思いだされるのが残念です(『昼行燈ノート・第55回 馬で行きたい』)

……二十代だった私もまた、この地(サン・ヴィクトワール山のふもと：引用者)を一人で旅していたことがあるからです。(中略)吹きさらしをこらえて歩いている二十代後半の私の胸には、人生の行く手の不安が渦巻いていました。学業も打ち捨て、もちろん就職のメドも立たず、なんのよりどころもなく、ただふらついているにすぎなかったからです。体じゅうにすき間風が入りこみ、まぶしい光のしぶきはトゲのようでした。(『同・第4回 プロヴァンスと青春』)

こうして振り返ることのできるがむしゃらな旅もやはり青春の特権なのだろう。

14 若者のエネルギーを代弁する文学 —小田実「なんでも見てやろう」—

自己確認の旅、今風の表現に倣うなら「自分探し」の旅が内省的な若者の琴線にふれる一方、もっと行動的で、好奇心とエネルギーにあふれる、若者に強く訴えかける旅の仕方が現れた。小田実(1932~2007)の『なんでも見てやろう』(1961年)である。

東大大学院在学中、25歳の時に「フルブライト基金」を受け、ハーバード大学大学院に留学、しかし、本人の言によると専攻の西洋古典学を究めようとしたのではなく、単に世界を見たかったからだと言っている。

……アメリカ合州国に留学したのも、べつに「西洋古典学」のウンノウをきわめるためではなかった。留学後、アメリカ合州国内部、メキシコ、ヨーロッパ、中近東、アジア各地を歩いて帰ったあと書いた「何でも見てやろう」の冒頭の数行がすべてを言いあらわしている。「ひとつ、アメリカへ行ってやろう、と私は思った。3年前の秋のことである。理曲はしごく簡単であった。私はアメリカを見なくなったのである。要するに、ただそれだけのことであった。」アメリカ合州国だけではなかった。私は世界を見たかった。留学を足がかりにさらに大きな旅に出た。これが「何でも見てやろう」の旅だ。(「小田実のホームページ・年譜—プロフィール」より)

貧乏旅行や無銭旅行、ヒッチハイクの極限の旅がここにある。怖いもの知らずというのか、若さゆえの無謀というべきか、すさまじいまでの体当たりと好奇心である。

たとえば田舎の大型スーパーなどで見られる画

一的な陳列物やパッケージ化された食材が放つ特有の「アメリカの匂い」に気づく。あるいはアラブ圏で騙されたり、インドの賤民に対する扱いを目の当たりにしたりして、先入観なしの目でさまざまな現実を受入れ、人間のむき出しの部分に触れていく。先進国の「豊かさ」ゆえの病根から発展途上国の凄惨な「貧困」までを、文字通り何でも見てゆく。若い小田の嗅覚と判断力は正確で、50年たった現在も人間の業や各国の基本的な宿命は変わっていない。

旅の後半、アメリカからヨーロッパへ渡る時、小田が持っていた金は200ドル。当時のレートで約7万円だ。あとはオスロ・東京間の航空券のみ。予算は1日1ドル、食べるのは街路の立ち食い、もしくはパンと牛乳。泊まるのは1泊100円相当のユースホステルだ。スポーツマンクラブ、スチューデントセンターにも泊まる。

ちなみに1964(昭和39)年海外旅行が自由化され、一人1回500ドルまで自由に持ち出すことができるようになった。

小田自身、当時を振り返ってこう言っている。

たしかにアメリカ合州国から始まって世界大にひろがった旅は、私の思考、人生に大きく風穴をあけた。そこから風は激しく入って来て、余分なものを吹き飛ばした。私はそれを書いた。(同上)

帰国後の日本はいわば「政治の季節」ともいべき時代で、小田は「ベトナムに平和を！市民連合」(いわゆる「ベ平連」)を結成(1965年)、やがて市民運動のシンボリック的存在となり、作家活動も反戦平和活動を中心としたものへとシフトしてゆく。

しかしこの著書は現在もなお、一人旅を志向する若者の入門書的な役割を果たし続けている。作家・沢木耕太郎(1947~)の世界紀行『深夜特

急』はその典型的なものであり、またカヌーイスト・野田知佑（1938～）らの活動にもその影響は見られるといえよう。

15 シベリア経由バックパッカーのバイブル

—五木寛之の『ロシア3部作』—

旅をめぐるのは、小田実とは違った形で同時代の若者に影響を与えた作家に五木寛之（1932～）がいる。

五木は大学でロシア文学を専攻、学費未納で除籍されてはいるが、1965年、33歳の時に、かねてよりのあこがれの地であったソ連（当時）・北欧を旅する。その時の体験をもとに書かれたのが『さらばモスクワ愚連隊』（1966年。第6回小説新人賞受賞）であり『蒼ざめた馬を見よ』（1967年。第56回直木賞受賞）であった。同時期に書かれた『青年は荒野をめざす』（1976年）も若者の旅心を刺激した。

ロシア3部作ともいべきこれらの作品を改めて読み返してみると、当時の若者は政治や社会に広い関心を持っていたことが懐かしく思い起こされる。冷戦状況下の東西対立やCIA対KGBといった諜報機関の相剋、そして自由を渴望するロシアの若者と日本人との接触。いわゆる中間小説と

いわれる軽い小説にも、政治や社会がしっかりと織り込まれている。

たとえば、『さらばモスクワ愚連隊』。

かつて『平凡パンチ』に連載されたこの小説にはジャズのようなスイング感が漂い、この本は60年代の若者に圧倒的に支持された。ロシアに日本のジャズを売り込みに行くという若者の夢を描いたポップな感覚の軽いタッチの小説だ。

しかし、話に登場するピアノ弾きのアメリカ青年はベトナムに行く兵士だったり、あるいはモスクワでの交渉相手にソ連の対外文化交流委員や日本大使館員がでてくるが、この館員が素朴な青年であると同時に高慢な官僚でもあるという二面性を持たせたりもする。

たまたま知り合ったトランペットを吹く少年ミーシャに連れていかれた酒場「赤い鳥」はソ連の“雪溶け”の落し子”スチリャーガ“(不良少年)たちの溜り場だ。日本の有力な政治家の死によって、この仕事をバックアップしていた大手商社が手を引くといった、政財界の複雑な事情ものぞかせるなど手が込んでいる。

たしかに登場する女性達は、背負う過去も国籍も様々であるわりには、いつも同じ雛型を感じさせるという欠点はあるものの、ミュージシャンの心意気、ジャズのあるべき姿、虐げられた者の心のうめきはしっかりと描かれ、音と映像がくつき

モスクワ メトロポールホテル シール (1970年)



りと浮かぶ名フレーズもある。時代を感じさせ、あわや海外日本人社会やモスクワの雰囲気も感じさせるなど、実にもりだくさんだ。

『蒼ざめた馬を見よ』にしてもそうだ。体制批判が織り込まれたソ連文学者の長編小説を海外に持ち出し、翻訳・出版するというスリリングな話で、米ソの対立と自由を求めるソ連知識人の苦悩が下敷きになっている。

主人公はアムステルダムから東欧諸国をまわり、モスクワを取材して目的地レニングラード（現サンクトペテルブルグ）に向かう——周到な計画が立てられ、実行される。随所にちりばめられたロシア文学の作品やソ連のイメージ、冷戦下の大国とその政治力、さらには個人一人ひとりの感情の動きまでが描かれる。主人公がレストランでとる食事も詳細で、ハンガリアン・スープ、キエフ風オムレツ、特製サラダ、ジャム入り紅茶など、きめ細かい。

『青年は荒野をめざす』も同様だ。この本のすべてはタイトルに表現されており、文庫本の帯に書かれたキャッチフレーズもこの本のすべてを物語っている。

ぼくらにとって音楽とは何か？ セックスとは？ 人間とは？ 放浪とは？ 燃焼する人生を求め、トランペットひとつかかえて荒野をめざす青年ジュンの痛快無類のヨーロッパ冒険旅行！

この作品は、創刊間もない若者向け週刊誌『平凡パンチ』に連載された。

現代は日々生きている世界こそが「荒野」と言えるかもしれないが、当時はタイトルの「荒野」とは「夢や希望」の同義語と思われた。良くも悪くも60年代当時の空気・熱気が色濃くたゆたう作品だ。

40年前、当時の若者たちは夢中になってこれを読み、主人公ジュンのようにシベリア経由で欧州を旅してみたいと夢見たものだ。

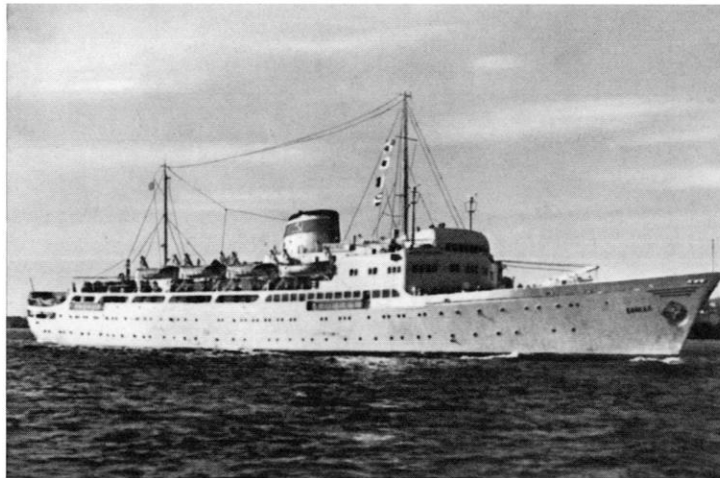
現に、当時、横浜・ナホトカ間には週3便もソ連（当時）船が就航しており、これを利用したソ連経由欧州行きのツアーは隆盛を極めた。今のようにならぬ格安航空券がない時代である。

横浜港を出た4千トン足らずの船は銚子沖から北上し、津軽海峡を抜けて2泊3日の旅を終え、ソ連沿海地方の港町・ナホトカに着く。ここから

横浜港南棧橋 ソ連船（当時）バイカル号の見送り風景（1970年）



ソ連船(当時)バイカル号(1970年)



バスに乗り換え、近くの「^{チーハオケアンスカヤ}太平洋駅」から一晩の夜行列車で一路ハバロフスクへ。翌朝ハバロフスク空港から国営航空アエロフロートで8時間かけモスクワへ。団員は2泊3日で市内観光や買い物などを楽しんだ後、3つのコースに分かれて欧州入りをする。「^{クラスナヤ・ストレラ}赤い矢」号と呼ばれる国際夜行列車でレニングラード(現サンクトペテルブルグ)経由フィンランドに入る「ヘルシンキコース」、チャーター航空便でスウェーデン入りする「ストックホルムコース」、それに「ショパン号」と呼ばれる国際列車(TEE)でポーランド・チェコスロバキア(当時)経由オーストリアに入る「ウィーンコース」であった。

大卒の初任給3万数千円の時代、旅行費11万円のこの「ソ連経由欧州行きセット旅行」は若者や学生のみならず、大学教授や一般人の利用も少なくなかった。欧州行き航空券片道35万円の時代である。

当時、片道切符で欧州入りを果たした若者たちは、主として北欧で皿洗いなどのアルバイトをして旅費を稼いだが、それが社会問題化し、マスコミに取りあげられたりした。

そこで政府は片道切符の旅行を禁止、同セット

旅行の復路コースが売られたりもした。

しかし商品には販売寿命が付き物で、航空機の大形化(ジャンボジェット機の導入)に伴い、格安航空券が市場を席卷するようになる。それが一般化するにつれ、ソ連船の定期便は減少を続け、やがて定期航路は廃止となり、ロングセラーを続けたこの旅行形態は姿を消すに至った。

16 旅情の変遷と雑誌『旅』の命運

旅—その言葉をつぶやくだけで、その響きを耳にするだけで、団塊の世代を含む旧世代はある甘酸っぱい郷愁を感じるだろう。

旅は青春につきもの、いわば若者の特権で、それは冒険と日常からの脱出を意味した。

しかし、1970年の大阪万博開催以降、日本経済の高度成長に伴い、新幹線網の拡充やジャンボジェット機の導入と相まって、旅は大型化・大衆化した。マスツーリズム時代の到来だ。

国際航空運賃はどんどん値下がりし、旅が身近なものになるに従い、旧来のいわゆる旅情が失われていったのはある意味当然であったかもしれな

い。アルバイトや貯金の苦勞は相対的に低減し、小金をためさえすればいつでも海外旅行ができる時代になったのだ。

若者も貧乏暮らしから解放され、こざれいで快適な学生生活が保障されるようになった。門限や規則づくめの不自由なユースホテルに何も寝袋やシーツ持参で泊り歩く必要はない。五木寛之の『さらばモスクワ愚連隊』や『青年は荒野をめざす』時代は終わったのだ。

それでも当初は、鉄道マニアや一人旅派が一定程度いて、旧来型の旅はそれなりに健在であった。

1922年（大正11年）創刊の雑誌『旅』はそうした一人旅派に支えられ、発行部数の低迷に悩みつつも2003年には創刊80周年を迎えた。1960年代には鉄道ファンや秘湯ファンなどの層に支えられ、旅行情報誌として類書のない本誌は貴重な存在であった。「海外旅行特集をすると売れない」というジンクスがあるほど、読者層は国内の一人旅を愛する人々であった。

しかし、さまざまなガイドブックの発行や海外旅行ブームに押され、2004年1月号、78巻1号、通番9241を以て、ついに『旅』は廃刊に追い込まれるに至った。

田山花袋の紀行文をのせ、松本清張の「点と線」を連載した歴史ある日本交通公社（現JTB）の旅行雑誌『旅』、多くの紀行作家を輩出し、旅行の醍醐味や旅行文化の広がりにも貢献してきた日本唯一の旅行雑誌『旅』、その編集・発行権は創刊80年にして新潮社に譲渡された。

現在『旅』は旅行をコアとする女性誌として発行されているが、生活文化提案型の他の女性誌との差別化は必ずしも十分とは言えず、往時の『旅』を懐かしむ声も聞かれる。

ただ、これは旅行情報誌に限った話ではなく、活字媒体や出版文化全体に共通する課題でもある。どの定刊雑誌も一定の読者層を確保するのが難しい時代を迎えているのだ。

鉄道マニアの雑誌、鉄道ジャーナル社の『旅と鉄道』も同じ命運をたどっている。

1971年創刊になるこの歴史ある季刊誌は2007年末に月刊化されたものの、2009年には休刊からついに廃刊に追い込まれた。『鉄道ジャーナル』が鉄道のハード主体の雑誌であるのに対し、本誌は汽車の旅を主とするソフトの雑誌で、往時は種村直樹などの鉄道作家の活躍の場であった。

かくして、若者たちの旅に対する思い入れの後退と軌を一にするかたちで、日本の旅行情報誌は影を薄くしている。代って売れているのは、日常圏ジャーを中心とする日帰りの旅やグルメ関連の情報誌である。

旅を通じて人生や生きる意味を考える文化は衰退し、「安い・近い・短い」の手軽な日常の楽しみが主流の時代になったのだ。

17 まとめ

—これからの旅ごろの在りか—

これまで見てきたとおり、人々の未知へのあこがれや好奇心がまだ見ぬ国への旅情を誘ってきた。それは文学の世界だけではなく、欧米の名画もまたこのあこがれを増幅してきたのだ。

「ローマの休日」（アメリカ・1953年）にしても「旅情」（イギリス・1955年）にしても、それぞれがラブ・ロマンスを背景に、ローマやヴェニスといった永遠の観光地を巧みに織り込み、ゆるぎない不朽の名作に仕立て上げている。

その手法の援用は現在の映画作りにも変わりはないものの、舞台となる土地柄がいまや憧れの地とは言えなくなりつつあり、「ご当地作品」の観客動員力は往時に及ぶべくもない。

旅が今日、人々の生活や生き方を考えさせ、人生を豊かにしてくれる縁（よすが）としての力を失っているとしたら、それはなぜなのだろうか？

情報化社会の到来によって「未知」のものがな

くなり、すべてが「既知」のものとしてしまった現在、行ったことのない土地、見知らぬ土地（デスティネーション）を探すのははや困難であり、また愚かしいことといえよう。

私たちはこれまで、行ったことのない国、降り立ったことのない街ばかりを旅先として求めてはこなかったか？ 一度訪れた国や都市はすでに行った土地として片づけてはこなかったか？ まだ見ぬ新しい観光地を「旅行先（デスティネーション）」として探し求めてはこなかったか？

すべてが既知化してしまった情報化社会のなかで、新たな旅心を回復させるとなると、従来の旅情の延長線にその姿は見えてこない。私たちはどこにその縁（よすが）を探ったらいいのだろうか？

ここで思い起こすのは、松尾芭蕉らの文人が行ってきた「歌枕の旅」である。

歌枕とは、一般に和歌に歌われた地名をいう。

古来より親しまれてきた大和や山城といった土地、あるいは神仏ゆかりの場所、歴史的な遺跡などをさす。また後代では古歌に読まれた地名も歌枕とされ、現実の風景というよりは、歌や物語の中にくり返し登場するうちに固有のイメージが形成されたものが多い。

稀代の旅行家・松尾芭蕉はその旅立ちの動機として、先人ゆかりの地を訪れる旅を常に念頭に置いた。西行、宗祇らの旅における苦勞をしのび、その足跡を求めて草深い碑や名残の場所へ立ち寄った。その唯一の頼りが古人の詠んだ歌であり紀行や日記に書かれた文章であった。

芭蕉の『奥の細道』はその意味で「歌枕を求めての旅」を綴った紀行文だといっても過言ではない。

有名なくだり、平泉の段では藤原氏三代の栄枯盛衰をしのび、「国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。」と述べ、あまりにも有名な「夏草や

つわもの
兵どもが夢の跡」の句を残している。

もっと直接的に歌枕を訪れ感極まっている個所もある。今の仙台の北郊・多賀城の壺碑、いわゆる「つぼの石ぶみ」である。これは坂上田村麻呂が建てたと伝えられた碑で、芭蕉はその碑文を書き写した後、こう述べている。

（この碑が建てられたのは：引用者）聖武
皇帝の御時に^{あた}当れり。むかしよりよみ^{おけ}置る歌
枕、おほく語^{かたりつた}伝ふといへども、山崩^{くづれ}、川流
て、道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木
は老て若木^{わかき}にかはれば、時移り代^よ変じて、其
跡たしかならぬ事のみを、爰^{ここ}に至りて疑なき
千歳^{せんざい}の記念、今眼前に古人^{かたみ}の心を^{けみ}閲す。行脚
の一徳^{ぞんめい}、存命^{よるこ}の悦び、羈旅^{きりよ}の勞^{らう}をわすれて、
涙も^{なみだ}落るばかり也。

（『おくのほそ道』[小学館『芭蕉文庫 去来抄』より]）

苔むし、文字も幽かになった神亀元年（724年）建立の石碑を見て、芭蕉は感涙している。数多くの歌枕がその跡かたすら失せがちの中で、こんな古いものがよくぞ残されてきた、それを見て古人の心を知ることができる今の自分、その命のありがたさよ、というのだ。

こうしたものを読むと、古人は必ずしも「未知」を訪ねて旅をしたのではなく、「既知」を確認すべく旅をしたことに気づく。歴史の追体験であり、時間軸の遡及である。

考えてみると、未知を訪ねる旅といえども、一定の情報を前提にまだ知らない部分をその土地に探し求めるわけであって、そこにはいわば「確認の旅」という要素がある。その時に重要なのは、ただ単に行ってみてきたという「事実」よりも、いかに「確認」してきたかという内容の蓄積であろう。

一人ひとりがこれまでの生を振り返るとき、是

が非でも確認しておきたい「コト」や「モノ」が誰にでもあるだろう。幼い頃からのあるいは長じて物心ついてからの関心事項や記憶と思い出、これからの道程を進めるにあたっては、そうした自分なりの「歌枕」を人生の一里塚にしていきたい。その思いが旅どころであり、旅への誘いなのではなかろうか。

であるならば、これからの旅は古人が行ってきた「歌枕の旅」いうことになろうか？

何も芭蕉らの事古りにたる歌枕である必要はない。旅人には人それぞれの確かめたいテーマや関心事項があるはずだ。

それが旅どころを促し、これまでの思い出の確認作業としての旅立ちを促す。

いいかえれば、人はそれぞれの歌枕を持っていて、その確認の涙を落とすため旅に出るのではなかろうか？

そうした思いに立つならば、最後の引用の詩歌として最もふさわしいのは次をおいてほかにあるまい。「いい日旅立ち」である。

改めてその歌を口ずさんでみよう、きっと人それぞれの「歌枕」と旅どころが立ちのぼってくるに違いない。

いい日旅立ち—谷村新司 作詞作曲

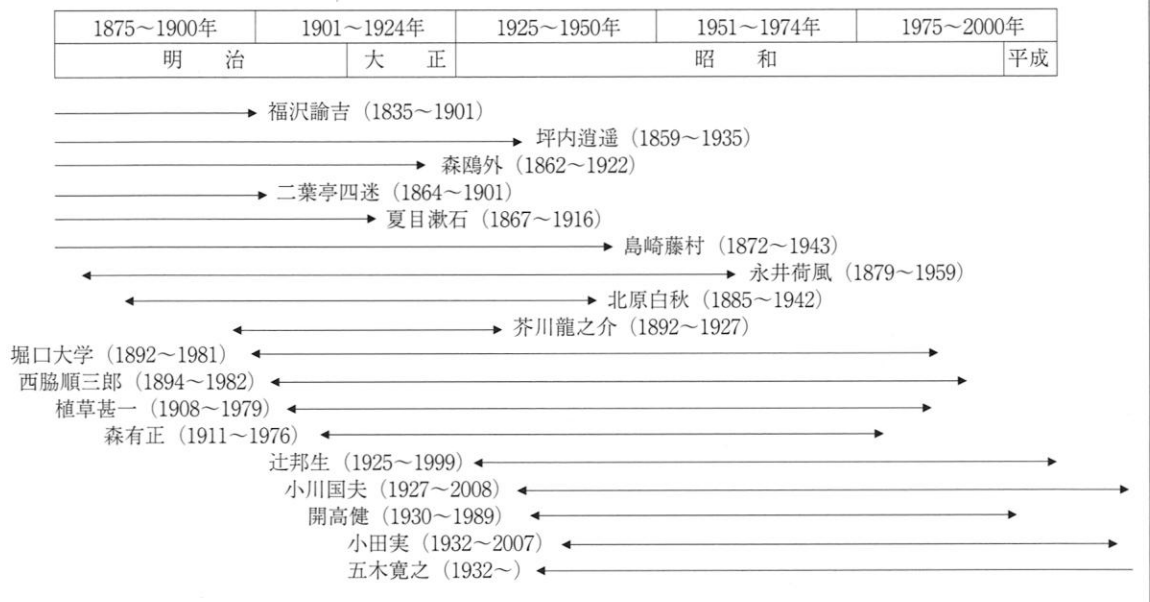
雪解け間近の 北の空に向かい
過ぎ去りし日々の夢を叫ぶとき
帰らぬ人達 熱い胸をよぎる
せめて今日から一人きり 旅に出る

ああ 日本のどこかに
私を待ってる人がいる

いい日旅立ち 夕焼けをさがしに
母の背中で聞いた歌を 道連れに

岬のはずれに少年は魚つり
青いすすきの小径を 帰るのか
私は今から 思い出を創るため

本稿関連文学者一覧



砂に枯木で書くつもり “さよなら” と

ああ日本のどこかに
私を待ってる人がいる
いい日旅立ち 羊雲をさがしに
父が教えてくれた歌を道連れに

ああ日本のどこかに
私を待ってる人がいる

いい日旅立ち 幸せをさがしに
子供の頃に歌った歌を道連れに (完)

(注) 詩文の引用は原則として、筑摩書房刊『現代日本文学大系』(1971年・昭和46年刊)に依った。これに未収録のものは、ウェブ・サイトの関連記載情報に依った。

(受付2009年11月10日 受理2009年12月8日)